

「腹が減っては戦はできぬと言うだろう？」

太陽も空の天辺に昇つてどのくらい経つたか。目の前にはほかほかの炊きあがつた白米がある。艶のある美しい白さがきらきらと輝いているこの大粒の米は我が本丸産の米だ。米を愛する我が本丸の刀剣男士に強請られて、主人が本丸の中にまあ立派な水田を用意した。ちなみに畑を愛する刀剣男士に強請られて、その近くには立派な畑もあつたりする。うちの主人は刀剣男士に甘い。

まあそんな我が本丸産の米がきらきらと輝きながら湯気を立てている。俺はそれをじつと見ている状況だ。隣にはこの本丸の初期刀である歌仙兼定がいる。彼は内番姿で本体の代わりにしゃもじを握っている。そんな訳で冒頭に居るのである。

「まあ……頭現して幾らか経つたから、な。之定の言いたい事は何となく分かりはする、がな？」

同じ美濃刀の縁もあり、和泉守兼定と同じく俺も我が本丸の初期刀殿の事は之定と呼んでいる。頭現当初早々に顔を見せに來た人間無骨や和泉守兼定から時間を空けて、随分と当たり障りない挨拶を寄越した歌仙兼定だったが、人間無骨や和泉守兼定だけでなく、左文字の短刀を始めとする細川ゆかりの刀たちが歌仙兼定について解説をしていたので、やっと話に來た歌仙兼定の話し方やつっけんどんな言葉じりも「成る程、人見知り」で飲み込めてしまった。

練度を上げるべく、出陣する日々の合間に内番と称していろいろな事をやらされるうちに、意外と器用

らしいと判断された俺は、厨番にも引き摺られていくようになった。厨番と言えば歌仙兼定と言われる程に、我が同郷の刀剣男士は食に関心がある個体が多いらしい。我が本丸の歌仙兼定も正しくそれで、燭台切光忠と共にまあいろいろな事を教えてくれた。こと歌仙兼定は大層喜んでくれた。どうやら、和泉守兼定は厨番には向いていないようだ。

あれよあれよという間に戦闘技術の他に、料理知識まで体得してしまった俺は、出陣要員であると同時に大事な厨番の戦力にも名を連ねているらしい。いやいや話が逸れてしまったな。

目の前にあるのは白米だけだ。これをどうするかと歌仙兼定の様子を見やれば、米櫃の横に「こりと水の張られたボウルが置かれた。すぐ横には塩の小山がある。——理解した。

俺はため息交じりに内番の袖をたすき掛けにする。その反応に歌仙兼定がにこりと微笑んだ。水場で手を洗つて振り返れば、他にも何やら皿が増えていた。

「で、今から食わせてやらにゃならん飢えた輩はどれ程いるんだ？」

俺の問いに歌仙兼定は中空を見ながら指折りする。十を超えた辺りで顔が引きつった。米を愛し、野菜を愛し、ついでに野山の肉——もとい、獣も愛する我が本丸の刀剣男士は飯を食らうのが好きだ。短刀も短刀なりに食う。飯に十以上が短刀だったとしても、用意する量は相当だ。

「米に具材つて事なら握り飯でいいんだな？海苔はどうする？」

梅干しに角切り昆布、菜ものにほぐされた鮭。並んでいく具材を見てから、歌仙兼定に目をやれば、

歌仙兼定は笑つて首を振った。

「今切らしてるんだ。数が足りないから今回はなしでいこうと思う」

大皿をいくつか出してきた歌仙兼定はそう言つてからこちらを見た。

「孫六は理解も早いし、作業も手早いから助かるよ。燭台切はまだ畑当番から戻つて来れなくてね。早めに上がつてくるとは言つてくれたんだけど、それでも彼だつて疲れているだろうし、夕餉の事もあるから幾らか僕の方で進めておきたかったんだ。誰か手伝いを頼めるものはいないかと非番のものの名を見ていたんだが、厨番をやつた事があるものがほとんどいなくてね……」

歌仙兼定はそう言つて肩を落とした。手を水につけて塩を摘まみながらため息をつく。

「以前、どうしても手が足りなくて急遽頼んだものがいたんだけどね」

「既に雲行きが怪しいな、何が起きた？」

少しばかり面白がりながら、孫六も同じように手を濡らし、塩を手を広げると米櫃から幾らかの米を取つて梅干しをひとつ摘まんで載せた。向かいの歌仙兼定は鮭を米の上に乘せていた。

「艶やかな玉鋼が量産されかけたね」

少し遠くを見て言う歌仙兼定に孫六は思わず目を細めた。

「どんな玉鋼だ、どんな」

「他より少しばかり小さな握りね、短刀たちの口の大きさに合うねと笑つて持ちあげてみて、重量感にまづいなと」

思い返しながらも手はきちんと作業を進める歌仙

兼定は、次に小さく切った小松菜と鰯節が混ぜたものを米の上に載せて、握り始めている。

「当刃はうまく三角になったと誇らしげだったから、続きを頼むべきか悩んでいたら、堀川がうまい事作業分担を変えてくれてね……お握りを作る係から豚汁の具材を切る係に変えてくれたよ。多少大きさがバラバラでも大鍋で作る豚汁なら幾らでも誤魔化しが効くし、具材の大小は喜ばれたから結果良しというところだったかな」

「……成る程、会津のは駄目だったんだな」

さらりと名を上げてみれば歌仙兼定は何とも複雑な顔をしていた。一回目で大正解だったようだ。

「僕らや堀川が忙しく動き回っているのを何か手伝おうと努力はしてくれたんだけどね。米が熱かったのもあつて加減がうまくできなかつたらしいよ。堀川の話によるとだけだね」

そう言いながら次のお握りを作り始める歌仙兼定に、孫六もまた塩を手に載せ、米を取る。

「会津のはまつすぐで分かりやすい。負けん気の強さは兼定というべきか」

「それじゃあ僕や無骨も同じになるんだが？」

「あんただって十分負けん気は強いだろう？無骨なんざ見ての通りだ。刀なんだから変に引くよりその方がいいと思うが？」

喋りながらも二振りで握り飯を量産していく。歌仙兼定は少しばかり口を歪めてできあがつた握り飯を大皿に並べて、また次を作り始めた。

「僕は文系なのだけだね」

「文系結構。別段、それに負けん気の強さが加わった事で悪い話にはならないだろうに」

孫六も次の握り飯の具を考えながら口を開く。歌仙兼定は眉を少し寄せて呟いた。

「雅じゃないだろう」

その言葉に少しだけ手を止めてから、孫六は一寸考えて梅干しを摘まんで米に載せた。

「そういうものか？あんたと出陣する事はあまりないが、弾かれた一撃を次で必ず胴体にぶち込む様はなかなかに見応えがあつていいと思つてるが」

「攻撃は打ち込んでこそだろう？弾かれたままにしておくなんて格好付かないからね。僕としては戦場で真剣必殺を放つてしまつた時、その後少しばかり気恥ずかしく思っているよ。そこまですずとも倒せるようにならなくてはならないのに、熱くなつてしまつて戦装束をぼろぼろにしてしまつて……全く雅じゃない。まだまだだなと思わざるを得ないところさ」

肩を落として呟く歌仙兼定だが、そんなこの打刀の猛攻のお陰で、幾度となく出陣した部隊が見事全振り帰還を果たしているという事実がある。事実、強いのだ。この義兄弟は。

「敗北するよりはずつと気分の良いものだと思うがねえ？」

不思議そうに呟けば、歌仙兼定は口の中で何やらもごもご呟きながら、さかさかと手を動かす。いろいろ感情が複雑なようだ。

刀の身でありながら、人のような器を持ち、人のように振る舞い、感情を持つ。何とも可笑しな事が起きているのがこの刀剣男士という姿だ。ただの刀であつたはずなのに、その刀を手に自ら敵を屠る。その傍ら、人のような生活を送り、起きて寝て食つてを繰り返す。

どんどんな数の増えていく目の前の握り飯を見つめて、孫六は当たり前になつてこの光景も不思議なものだと思ふ。

「人の子が食うものを、己も食らつて作つてするようになるとはなあ」

ぼそり呟けば、歌仙兼定はばちくり瞬いてから笑しげに微笑んだ。

「そうだね。僕も料理ができるようになるなんて思ひもしなかつたよ。茶を点てたり、花を愛でたり、書を読んだり、和歌を愉しむ。刀の頃は見ていただけのものを体験できるのは、何とも興味深い」

幸せそうに笑う横顔を見ながら、ふと思ひ出した事を口にする。

「そういや、無骨が何やら買ったがつてたぞ、多分茶器だつたと思うが。気になるものがあるから、あんたに目利きしてほしいとか何とか」

「おや、それは素敵だ。今日の彼の予定はどうなつていたかな？」

ばつと顔を輝かせて歌仙兼定はにこにこ中空を見上げて人間無骨の予定を思い出そうとしていた。

「無骨はこの時間は遠征だろう。帰つてきたら話を聞いてやればいい。しかし、この間も何か買うと言つていなかったか？あいつの懐は大丈夫なのかねえ」

首を傾げながらそう呟けば、歌仙兼定が少しばかり目を細めた。

「この間のは茶器ではないよ。僕も一緒に見に行つただけだね。残念ながらも買い手が付いてしまつていたんだ。残念な事をしたよ」

嘆息する歌仙兼定の様子を一瞥して、孫六は握つていた分を大皿に載せた。

「ならまあ、今回の手に入るといいな」

大皿に並んだ握り飯を眺める。二振りで握ってきいているが大きなはほぼ同じでどちらが作ったと分からない程に揃った出来映えになっている。次をと思い、米櫃を見ればいつの間にやら底が見えるようになっていた。

「おやまあ。もう終わりが見え始めたか」

孫六はそう呟きながら、米を手のひらに載せて鮭を包んで握り始めた。

「ああ、話しながら作っていたけれど、もう終わりそうだね。ありがとう、孫六。燭台切が来る前に握り作りは終われそう」

歌仙兼定はほっとした様子で作っていた分を大皿に載せて、次の握り飯を作り始めた。

「あと、何を支度するつもりでいるんだ？」

手の中の握り飯を大皿に移し、またひとつと握り始めると、歌仙兼定は笑って肩をすくめた。

「お握りに香の物、後は味噌汁と卵焼きの予定だよ。時間にまだ余裕はあるし、卵焼きは大量に作るつもりはないから、そこまで慌てなくていいんだ」

「成る程。握り飯で腹を膨らせるつもりだから、ここまで数がある訳か」

幾つもの大皿に所狭しと並んだ握り飯を見やって孫六は笑う。

「これがどのくらいで無くなるのやら」

孫六がそう言うのと歌仙兼定は少しばかり眉を下げた。

「これ以上は我慢してもらうさ。夕餉でしっかり食べてもらうよ」

空になった米櫃を見やり、歌仙兼定は満足げに笑

みを深めた。軽く手を洗った歌仙兼定がラップを片手に大皿の前に立つ。ほんのり湯気の立つ握り飯の載った大皿に軽くラップを掛けていく様を見ながら孫六は指に付いていた米粒をべろり舐めとると、綺麗になくなった具材の載っていた小皿やらをまとめて流し台へと移動させた。

「ああ、洗ひ物はいよいよ、僕の方でやっておくから」

歌仙兼定はそう言うて孫六を制すると、ラップを置いて冷蔵庫の横にある小さな冷蔵庫に向かった。あちらは厨房専用で皆が食べる食材が入っている冷蔵庫ではない。孫六がひとつ瞬いてから手を洗っていると、歌仙兼定がにこりと微笑んでそこから取り出した布巾のかかった何やらを持ってきた。

「午前に少し時間があって作ったんだ。もう少ししたら主と今日の近侍殿に持っていこうと思つてね。その余りだが良かったら八つ時のお伴にしておくね」

そう言うて見せてくれたのは紅葉を模した上生菓子だった。黄色から橙色に変わる色合いが深まる秋の風景を臉の裏に思い起こさせる見事な出来映えである。

「ほう、これはこれは」

孫六が破顔すると歌仙兼定も満足げな笑みを浮かべる。

「濃いめの緑茶を煎れるから、一緒に召し上がれ。ラップの上から布巾を掛けておいたからそこまで館も硬くはなつていないと思うけどね」

そう言うて湯を沸かし始めた歌仙兼定に、孫六は素直に礼を言つて小皿と湯呑みが載りそうな盆を出してきて作業台の上に置いた。そのまま他愛ない会話をしていると、こちらに向かつてくる足音がひとつ響いてきた。二振りでその音に耳を澄ませて苦笑する。

少しばかり慌てた足音を聞きながら時計を見やれば、握り飯を作り始めてからそれなりに時間は経っていた。

「ごめんね、歌仙君！収穫作業が楽しくなっちゃってつい遅くなっちゃったよ！」

厨の暖簾を片手で掬い、眉を下げた顔で駆け込んできた燭台切光忠は、手前に立っていた孫六と急須を片手に微笑んでいる歌仙兼定を見やり、目をぱちぱちとさせてから、作業台に並んだ大皿の上の握り飯に、声をあげた。

「孫六さん、手伝ってくれたの！うわ、ありがとう、ごめんね？」

ばたばたと中へ入つてくると、燭台切は握り飯の数をざつと確認して、ほっとしたように微笑んだ。

「何の。いつもあんたらがやつてる事に比べりゃ簡単なものだったよ。ちゃあんと之定から報酬もらつてるしね」

孫六がにんまり笑つて今し方煎れてもらった茶の入った湯呑みを小皿の載った盆に載せると、燭台切光忠はそれを見やつてまた声をあげた。

「あ、今朝歌仙君が作つたお菓子だね？色合いがとても秋めいていいいなあと僕も思つたんだよ」

にこにこして告げた燭台切光忠を見てから、ちらりと視線を移せば、誇らしげに胸を張る義兄弟がいた。何とも嬉しそうなその顔に吹き出すのをぐつと堪えて盆を持ちあげた。

「じゃあ、俺はこれで。之定、有難ういただくよ」

そのまま燭台切光忠の横を通過しようとするのと、燭台切光忠から声がかかった。

「待つて待つて。僕からもお礼させて。孫六さん、今

日の厨番でもなかったんだし、手伝ってくれたならお礼はしなきゃ」

そう言った燭台切光忠は柵の方へ移動すると、普段触る事のない高さから何やら箱を引っ張りだし、手を入れてこそそやつてから戻ってきた。盆の上に追加とばかりに載せられたのは上生菓子より少し小さな個包装の菓子のようだった。

見慣れぬものに目を瞬かせていると、燭台切光忠は歌仙兼定にも差し出してから自分の分もひとつ取ると、また元の位置に箱を閉まってにつこり微笑んだ。

「マロングラッセって言うてね。お砂糖で包んである栗のお菓子だよ。僕のお気に入りひとつで、あまり数はないからこそ隠してるんだ。その和菓子に合わせたお茶なら渋めでしょ？これも合うと思うよ」

「栗も秋らしくていいな。僕ももらつていいのかい？嬉しいよ」

頬を緩めた歌仙兼定に燭台切光忠は笑顔で口を開いた。

「一番手間のかかる作業をやつてもらつたんだもの。歌仙君もありがとう。後はお味噌汁と卵焼きだったよね。僕も頑張るよ」

笑顔で会話する厨番の二振りをしながら、孫六も知らぬ菓子に少しばかり頬を緩めた。

「じゃあ頂いていくよ」

そう告げて暖簾を潜る。二振りに片手を振って、軽い足取りで歩いて自室へ向かった。

障子を開けて庭が見える位置に陣取ると、盆を置いて畳の上に腰を下ろした。緑色の木々の合間に黄色くなった葉や赤い葉がちらほら見える。本丸の庭もすっかり秋めいて来ている。

それを眺めながら茶を一口飲んで、歌仙兼定作の上生菓子を黒文字で切つて口に運ぶ。甘すぎない餡が茶を飲んでさっぱりした口の中に広がっていく。こういう味わいを愉しむようになったのは顕現してどのくらいしてからだったのだろうか。本丸の庭が色を変える姿を見るのも何度目だろう。そんな事を思いながら、目にも楽しい和菓子を口に運ぶ。小さな和菓子はすぐに小皿から消えたので、孫六は茶をもう一すすりする。口から喉へと温かさが流れていく。

人の子に似たこの器は本当によくできていると思いつつ、燭台切からもらつた洋菓子を摘まむ。包装をそろりと開いてみると、栗の形をした表面がてらりと輝く菓子が出てきた。そのまま摘まんで一口に放り込んで咀嚼する。砂糖の甘さとその中であつたのであろう栗の甘さが口の中に広がる。先程の和菓子とはまた異なる甘さに驚きながら何度か咀嚼し、こくりと飲み込んだ。どちらも砂糖が使つてあるはずだが、こும்も味わいが変わるのかと感心しながら、思つた以上に甘かつた洋菓子に湯呑みを持ちあげ茶をすする。渋めの茶が口の中に広がって孫六は緩く微笑んだ。洋菓子の方は短刀や甘い物好きな輩が喜ぶだろうと思つた。存外、和泉守兼定あたりなら気に入るかもしれない。そんな事を考えて喉の奥で笑う。ふと耳を澄ませば、どこからか賑やかな声が聞こえて始めている。出陣していたものたちが帰つてきたのだらう。もしかしたら遠征組かもしれない。風呂上がりの連中のもとへあの握り飯が運ばれるのも時間の問題だなと思ひながら、孫六は部屋の中の行李から和綴じ本を取り出し、同じ場所に戻つてくると庭を横目に本を読み始めた。わいわい騒がしかった声は一

度静まり、音を忘れた頃に再び賑やかな声が響き始めた。聞こえてくる所々で先程握り飯に入れ込んだ具材の名が聞こえてくるので、きつと中身が何だったかで盛り上がっているのだろう。

「平和で何より」

くつりと喉で笑つた孫六は、賑やかな声を遠くに聞き流しながら本の頁をめくつた。柔らかな日差しを浴びながら、穏やかな心地で文字を追いかける。孫六の今日の出陣は夕刻からだ。残念ながら歌仙兼定や燭台切光忠の作る夕餉は食べられないが、戻る頃には彼等によつてまた握り飯が用意されているのだらう。もしかしたら他の誰かも手伝うのかもしれない。ふと、どんな具材が入つた握り飯が出てくるのだろうかと思ひ至つて、孫六は口の端を緩めた。——何と可愛らしい楽しみの尽きない日々であらうか。

「明日は何が起きるやら」

大事はご遠慮したいが、小さな厄介事なら愉しもう。誰ぞと鍛錬がてら死合うのも愉しからう。顕現して何度目かの秋。孫六兼元は今日もささやかな日々をご機嫌に過ごしている。